

「ICFの活用による支援と評価について」

NPO法人岡山高等学院

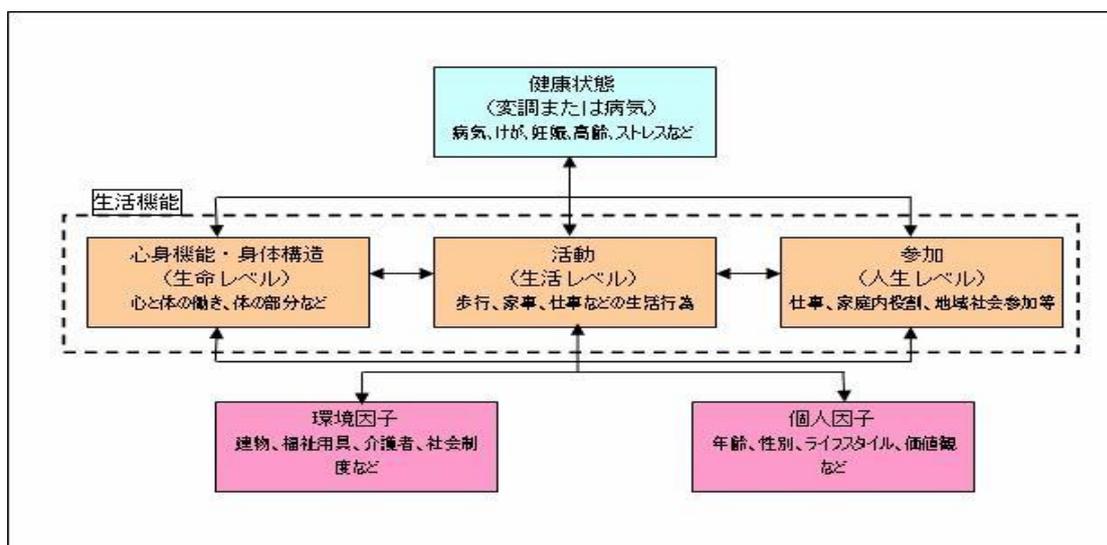
ICF (International Classification of Functioning, Disability and health) とは、日本語では「国際生活機能分類」と訳されています。WHO (世界保健機構) が、1980年に「国際障害分類 (ICIDH ; International Classification of Impairments, Disabilities and Handicaps)」として整理したものを、名称とともに、新しい考え方のもとで改訂したものです。

ICFは、健康状態、生活機能、背景因子の3つの要素で構成されています。そして、生活機能は、心身機能・身体構造、活動、参加の3つのレベルに、背景因子は環境因子と個人因子に分けられています。それぞれの言葉の意味は以下の通りです。

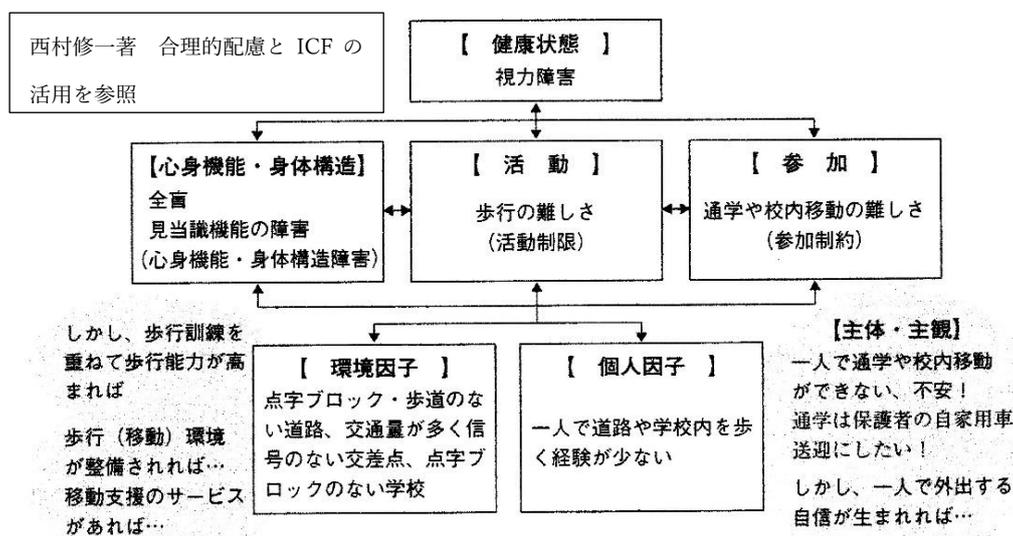
- ① 健康状態…疾病や体の不調、怪我、妊娠、高齢など様々なものを含む概念
- ② 心身機能・身体構造…人の体の仕組みや働きなど生命の維持につながるものをさす概念
- ③ 活動…目的を持って行う一連の動作からなる生活行為で、している活動（実際に行っている生活行為）とできる活動（まだ発揮されていない能力）に分類
- ④ 参加…家庭、学校、会社、地域社会などで何らの役割をそれなりに担っている状況
- ⑤ 環境因子…人をとりまく物的、人的、社会的・制度的環境
- ⑥ 個人因子…年齢や性別、生活スタイルなど個人を形作っているすべてのもの（個性）

人の健康状態に関係した生活機能から、その人を取り巻く社会制度や社会資源までを整理して、記述・表現しようとするものです。その関係を図式化したものを関連図といいます。それぞれの構成要素は互いに作用しあう関係にあり、それを矢印で示してあります。

関連図



その人を取り巻く環境（環境因子）や心身機能の好・不調（心身機能・身体構造）、それにより何ができて何ができないのか（活動）、さらに社会とどう関わっているのか（参加）、本人の願い（個人因子）は何かなど、これらの各要素の情報収集を行い、相互の関連を考えていきます。



ICF構成要素間の相互作用の図

この図は、視覚障害児の例を ICF の構成要素間の相互作用の図（関連図）として記載したものです。全盲（心身機能・身体構造）で歩行困難（活動）な彼をとりまく環境をみると、自宅周辺は歩道のない道路が多く、点字ブロックは未整備で、交通量も多く、信号機のない交差点も多くあります（環境因子）。学校内の歩行環境も点字ブロックが未設置の状況（環境因子）で、歩行経験も少なく（参加）必要な歩行能力が身につけていない（活動）ので、構内を一人で歩く不安も抱えています。通学や校内歩行に、いくつものマイナス要因が重なって困難な状況が生じています。

しかし、周辺道路に歩道や点字ブロック、音声信号の設置等が進み、また、学校内も歩きやすい環境が整備され、歩行訓練を通して歩行能力を高め、一人で歩く自信がもてれば等々の条件が整っていけば、一人での移動は不可能ではなくなります。諸要素を関連づけ、構成要素間の相互作用を考えることで、支援・援助の方策がさまざまに見えてきます。

不登校の子どもの場合、ICF のモデルでみると、学校に行かないということで顕著に阻害されるのが、「参加」です。参加が阻害されることで「活動」の機会が狭まり、思ったように活動できないことで、親子関係をはじめ様々な人間関係がうまく取れなくなり、不安傾向や強迫症状など心身機能に変調が出てくるようになります（二次障害）。不登校の多くはこのような流れで進むと考えられます。なぜ参加が阻害されるのでしょうか。

文部科学省の調査では、不登校の原因を、「情緒的混乱」や「無垢力」、「あそび・非行」

など、もっぱら「個人因子」に求め、「環境因子」には目を向けてこなかったからではないでしょうか。しかし、生活機能の低下は個人因子と環境因子の相互作用という ICF の考え方に立てば、背景因子からの見直しを行うことで生活機能の向上を図ることも考えられます。特に、子どもの場合、本人の努力で変えられる部分は、当然、大人より少ないのが現実ではないでしょうか。子どもたちが動きやすくなるように変えるべき、変わるべきは、子どもを取り巻く環境ということになります。

現在の学校現場になじめず、学校が居場所になっていない不登校の子どもたちにとって、彼らが実際に求めているのは、次のようなことではないでしょうか。いろいろなことを体験し自信や意欲を作り出していく体験、また、仲間（PEER）と楽しくやれる遊び心がある関係づくりです。そして、失敗しても認められる、何度でもやり直せる場です。そうした環境の中で、ありのままの自分を表出でき、楽しい・うれしいという肯定感情を体験するなかで、やってみたいという意欲とできたという達成感が蓄積されていき、新たなる自己をつくりだしていけるのではないのでしょうか。

ファミリーキャンプという日常と少し離れた環境の中で、楽しい体験、仲間やその家族、ボランティア等との人間関係づくりを軸として、参加前の状況とその後の活動状況等を含め、ICF の考え方にに基づき、各構成要素間の相互作用を考えながら本人・家族の変容を確認し、成果や課題を検証しつつ、QOL の向上に向けた具体的な支援についても考えていくことができるには考えています。

参考文献

- 世界保健機構 国際生活機能分類 一国際障害分類改訂版一 中央法規 2003 年
世界保健機構 国際生活機能分類 一児童版一 厚生労働省大臣官房統計情報部編
財団法人 厚生統計協会 2009 年
上田 敏 著 ICF の理解と活用 一人が「生きること」「生きることの困難（障害）」
をどうとらえるかー きょうされん 2005 年
西村 修一著 合理的配慮と ICF の活用 クリエイツかもがわ 2014 年
大阪障害者支援センター・ICF を用いた個別支援計画策定プログラム開発検討会編
本人主体の「個別支援計画」ワークブック かもがわ出版 2014 年